

戦艦建造技術をめぐるテクノ・ナショナリズム 言説の歴史社会学的研究

塚原 真梨佳

本研究は、自国の戦艦や戦艦を建造する「技術」に対して抱く「世界一」という認識についての研究である。「日本の〇〇は世界一」というような自国が他国に対して優越しているという意識は、国民国家を基本的な共同体の単位として、国民(ネーション)の構築・統合を強調する考え方である「ナショナリズム」が本質的に含むものである。本研究ではこのような「技術(力)」を根拠に自国の優越性を強調する言説を一種の「テクノ・ナショナリズム」として捉え、戦前期の日本海軍が戦艦建造技術やその所産である戦艦をめぐってテクノ・ナショナリズム言説を構築していったかを分析する。

社会学におけるテクノ・ナショナリズム研究においては、主に戦後民主主義の下で構築された家電技術などをめぐるテクノ・ナショナリズムについての分析が行われてきた。そこでは敗戦後の日本という時空間の中で、占領国であるアメリカとの同一化を図ることで形成されたテクノ・ナショナリズムの構造が家電広告の分析などを通じて明らかにされてきた。しかしながら、技術に対して「ナショナルなもの」を見出し追求していくようなイデオロギーは、戦後に限らず戦前においても見られるものである。本研究では、専攻研究でこれまで明らかにされてこなかった戦前における、テクノ・ナショナリズム構築の力学を明らかにすることを通して、戦前戦後においていかなる連続性が見出されるのか、あるいは断絶しているのかを検討する。

本研究の目的は、日本が近代国家として成立していく中で戦艦建造技術とその技術的所産である戦艦という存在がいかにしてテクノロジーをめぐるナショナル・アイデンティティとして機能するようになり、テクノ・ナショナリズムを構築したのかを明らかにすることである。

特に日本(自己)と西洋(他者)の対立項と日本海軍(支配者層)と国民(従属層)の対立項の二つを分析軸に据え、いかなる力学のもとで技術をめぐるテクノ・ナショナリズム言説が構築されていたかを分析することを通して、戦艦という存在が近代日本社会においていかにしてテクノロジーをめぐるナショナル・アイデンティティの拠り所として機能するようになり、戦前期におけるテクノ・ナショナリズムを構築しえたのかを明らかにする。

本研究は以上のような目的のもと、海軍関係者によって執筆されていた軍事雑誌『海軍 The Navy』の通史的分析を行なっている。

『海軍 The Navy』の分析を通して、戦後一貫して「同一化すべき他者」として想定されていた「西洋」が、戦前においてはその時期の状況ごとに異なる意味を持つ存在としてそれぞれ表象されていたこと、西洋がいかに日本を眼差しているかということが日本の技術をめぐる自己イメージに多大な影響を及ぼしていたことが明らかにされる。また、戦前期のテクノ・ナショナリズム言説において支配者層である日本海軍と従属層である国民とは、戦後一般に想定されたような支配者層の「上からの強制」によって戦艦を国威の象徴として戴くイデオロギーを一方的に押し付けられたのではなく、海軍と国民の対抗関係や交渉によってある種の合意形成がなされていったことも明らかにされる。

また、戦前の否定によって存立した民主的なテクノ・ナショナリズムと、戦前との連続性の中で存立した戦艦大和のテクノ・ナショナリズムという戦後における2つのテクノ・ナショナリズムの有り様を指摘し、戦前のテクノ・ナショナリズムは、政治的な次元でナショナルなものを追い求めることが忌避された戦後のテクノ・ナショナリズムにおいて「科学技術」に自らのナショナル・アイデンティティを見出そうとする心性そのものは継承されたが、その他の特徴は漂白され、継承されなかった。その一方で、戦艦大和という神話を通して戦前と戦後の連続性が見出され、戦前期に構想されたような日本の科学技術の優越性を誇示するナショナリズムが戦後にも継承されたことを示した。